

## 新刊紹介

石井紀子・今野裕子 編著

### 『法-文化圏』とアメリカ——20世紀トランスナショナル・ヒストリーの新視角

(上智大学出版, 2022年, 3,080円)

本書は「20世紀アメリカを中心としたトランスナショナルな法文化圏の形成と変容」(科研費 石井紀子代表)による研究成果であり、ナショナルな統治の境界線が溶け合う空間、法制史においてはリーガル・ボーダーランズといわれる場の歴史的動態を探る論文集である。6章からなる本書には1章を除き、アメリカ史研究を起点とする論稿がおさめられており、トランスナショナル・ヒストリーの醍醐味に溢れている。

本書は「特に法的概念や規範に纏わる価値観を共有する越境的な文化圏」(13頁)としての「法-文化圏」を基礎的な枠組みに据えている。西洋と非西洋との出会いは、異なる価値観のせめぎ合いをもたらすものであった。本書の語る「法-文化圏」は、いずれも英米圏の思想潮流に由来する理念や規範が、非西洋的なものに遭遇し、何らかの実践や変容を迫られた場に接続されるものである。ここで取り上げられている規範には、国家主体により制定された成文法に限らず、社会秩序のあり方を模索する理念や施策が広く含まれる。例えば、人権や人道主義をめぐる「法-文化圏」において中心的な役割を担ってきたのは、国際赤十字運動やアムネスティ・インターナショナルなどのNGOであり、主権国家に限られるものではない。

本書の提唱する「法-文化圏」という概念は多面的である。ローカリゼーションを共通項とする最初の2章では、ボーダーランズに生きる人々の生活圈をかたちづくる法制度とその変遷から、「法-文化圏」という視座が描き出される。太平洋の両側に宣教師たちの足跡を追う第4章で、「法-文化圏」の主軸となるのはキリスト教普遍主義とその変容であり、ここでは法と文化の結びつきの多様性が照らし出される。続く第5章と第6章では、国際法との対話から形成される「法-文化圏」の政治的な脆さ、そして人権といった普遍的理念がその儘さゆえにアメリカの政治外交に浸透していく様が浮かび上がる。南アフリカに焦点が当てられた第3章も含め、本書を通して紡がれる「法-文化圏」のありようは、トランスナショナル・ヒストリーという学問的営為の豊さと難しさを映しだしている。我々読者が本書を通じ、歴史の地図の上でどのような「法-文化圏」を見出すのかは、我々自身の関心にも委ねられているのだろう。

法文化をめぐる歴史研究は、アメリカ合衆国の歴史学界では近年最も勢いのある分野に数えられるだろう。他方で日本における法学と歴史学の乖離は、アメリカ研究においてはリーガル・ヒストリーの希薄さに結びついてしまっている。だが、近年のアメリカ社会における連邦最高裁の存在感を鑑みても、法文化という研究主題へのより多角的なアプローチが求められている。この点でも、本書は今後のアメリカ研究の方向性を示すものといえよう。

大鳥由香子（東京外国语大学）

三添篤郎 著

### 『冷戦アメリカの誕生——協働する文化と研究』

(小鳥遊書房, 2021年, 2,750円)

本書の原型は、筑波大学での博士論文『チェーン・リアクション—冷戦初期合衆国における学術領域の編成』であり、原爆、補聴器、サイレン、学力テスト、テレビ、航空産業、未来予測学、そして映画と文学など、意外な諸領域が「チェーン・リアクション」を展開し、「未知との遭遇」を果たす。

一章の「核と学の遭遇—『ダック・アンド・カヴァー』、コナント、サリンジャー」では、核攻撃時に届み頭を覆うことを説く1951年の教育映画『ダック・アンド・カヴァー』を皮切りに、教育が国防のためのマンパワー育成と共振する「核と学の遭遇」が示される。核科学者でハーヴード学長のコナントは、学力を優先するメリットクラシーを推進した。『ライ麦畑でつかまえて』のIQの能力主義を肯定するホールデンもその流れと無縁ではないが、最終的に彼は精神病棟に収容される。『ライ麦畑でつかまえて』をマンパワー養成ための冷戦期の大学入学を永遠に先延ばしにする非大学受験小説と指摘する。

二章「戦後の補綴術—補聴器をつけた冷戦戦士たち」では、聞くことの重要性が追求される。難聴に悩む帰還兵士は不能の記号の補聴器を嫌がったが、ソ連は主人の声を受動的に聴く国民で構成され、アメリカは対話の国家であることを誇った。赤狩りの公聴会、1953年の映画『宇宙戦争』の対話に耳を傾けない難聴者としての火星人、サイレン訓練の分析も興味深い。

三章「対抗するサウンドスケープ—『路上』における音響ネットワークの生成」は、聴覚的テクストとして『路上』を論じ、サイレンの音響防衛と対比する。潜水艦のソナー開発はレコードやラジオに応用されたが、冷戦時の音の文化とビート派の関係が追跡される。

四章「アウター・リミツ—超心理学者ジョセフ・バンクス・ラインのテレパシー研究」においては、兵士への洗脳の脅威が説かれるさなか、テレパシーという超心理学が共産主義の脅威に立ち向かう兵器と想定され、ビート派を経由して、コンピューター文化へと接合されてゆく歴史が浮き彫りになる。

五章「ティファニーで冷戦を—『ティファニーで朝食を』における航空旅行の地政学」は、自閉的空間とされてきた『ティファニーで朝食を』を、冷戦という閉じられた世界に対抗する開かれたテクストとして、社会性を捉え直す。海外旅行は自由主義諸国が相互に交流し、共産圏の台頭を封じ込める民主主義の武器だった。旅行者ホリデーとブラジル外交官ホセとの恋も国家の外交面との絡みで解釈する。

六章「使用可能な未来—未来学の編成とポスト冷戦の構想」では、アメリカがソ連に勝利する将来を予測する未来学の台頭が検証される。50年代SF映画のようなソ連を表象するエイリアンが敵ではなく、人工知能が敵となり、ボーマン船長が人類を牽引する特使になる『二〇〇一年宇宙の旅』もまた未来学の言説の一環だった。本書では様々なテクストが「リミツ」を超えて繋がる快感を堪能できるだろう。

西山智則（埼玉学園大学）